徳洲会グループ
TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP

発行
一般社団法人徳洲会
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL：03-3262-3133

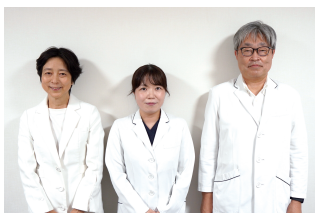
制作
一般社団法人徳洲会　広報部
TEL：03-3288-5580　FAX：03-3263-8125
Email：news@tokushukai.jp

ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL
徳洲新聞
TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS
No.1564

湘南鎌倉総合病院
最新がん治療「BNCT」体制を拡充
幅広いがん種に対応し原則1回の照射で完了

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は、4月に特定臨床研究として開始したBNCT（ホウ素中性子捕捉療法）の体制強化を図っている。同院はグループ内外からの受け入れをさらに強固にし、先端的な医療をより多くの患者さんに届けるための取り組みを精力的に展開。具体的には、受診窓口の拡充や多職種カンファレンスの定例化など、患者さんが迅速・安心に治療に移行できる環境整備に注力している。


専用のCT（コンピュータ断層撮影）装置を備えたBNCT治療室


（左から）大村・主任部長、熊澤医師、澤木・主任部長


「高度ながん医療に挑む」と（左から）渡辺副院長、中村センター長


BNCTの診療推進を強力に進める大橋室長

BNCTはホウ素を含む薬剤を点滴し、がん細胞に選択的に取り込ませた後、体外から中性子線を照射して生じる反応を利用した治療法だ。この反応によって生じる放射線は、細胞1個分程度の距離しか届かないため、まわりの正常組織に及ぼす影響を極力抑えつつ、がん細胞を選択的に攻撃することができる。

実臨床では国内6施設目、世界でも10施設目。湘南鎌倉病院のBNCT装置は一定の条件下で従来装置と比較すると、中性子線の出力が約3倍という高出力型で、国内では初導入。国外ではフィンランドのヘルシンキ大学病院のみが有する。

小林修三院長は「BNCTは原則1回で完了し、通院などによる日常生活への負担を軽減します。頭頸部以外にも、全身の幅広い悪性腫瘍を対象としており、手術が難しい患者さんの治療の選択肢を広げると期待されています」とアピールする。

同院では現在、特定臨床研究としてBNCTを実施。「画像検査により、がんにホウ素薬剤が集まりやすいことが確認された方」、「手術が困難」、「再発や局所進行により、従来の治療が適応しにくい」などの条件を満たした患者さんが対象。18歳以上で、病変が照射野内にとどまっていることも条件だ。ただし、これに該当しない場合であっても、自由診療として相談に応じている。

2年間で50例の登録を目指し臨床データの蓄積を推進中。すでに脊髄腫瘍や喉頭がん再発、頭部血管肉腫といった難治症例に対し治療を行い、いずれの症例でも腫瘍の縮小が見られ、重篤な副作用は認められなかった。

大村素子・放射線医療センター長兼放射線腫瘍科主任部長は、「放射線治療の再照射が難しい方や、他の治療手段が限られた患者さんにとっても、BNCTは有効な選択肢となり得ます。ひとりでも多くの必要とする患者さんに、この治療を届けていきたいです」と意欲的。

熊澤麻衣・放射線腫瘍科医師も、「標準治療後に再発した治療抵抗性の腫瘍に対しても、BNCTによって腫瘍の縮小が認められています。また、副作用も比較的少ない印象で、BNCTの有用性を臨床の現場で感じています」と手応えを感じている。

同院では脳神経外科をはじめ各診療科から、BNCTへ患者さんを紹介する多科連携を行っている。中村大志・脳腫瘍・頭頸部腫瘍センター長兼脳腫瘍外科部長は、「悪性脳腫瘍の患者さんは不安も強く、標準治療後の再発で治療選択肢に困っているケースが多くあります。初発の段階から将来の選択肢としてBNCTを提示しつつ、信頼関係を築きながら最後の砦としてしっかり支えていかなければなりません」と語気を強める。

さらに、渡辺剛史・副院長兼脳神経外科主任部長は、「一民間病院でありながら、先端的な医療機器を導入し、大学病院レベルの高度ながん医療に挑む姿勢は、当院の大きな強みと言えます。多職種が一体となり、安全で確実なBNCTを地域や全国の患者さんに届けていきたいと思います」と決意を語る。

多職種カンファ開催で対応迅速化
相談フォーム開設し受け入れ拡充

臨床による成果の一方で、受診に至るまでの体制整備や情報発信は、さらなる強化が求められている。BNCTの存在や適応可能性を広く周知することは、普及に向け欠かせない。医療関係者や一般の認知度は、まだ十分とは言えず、グループ病院からの患者紹介も限られている。

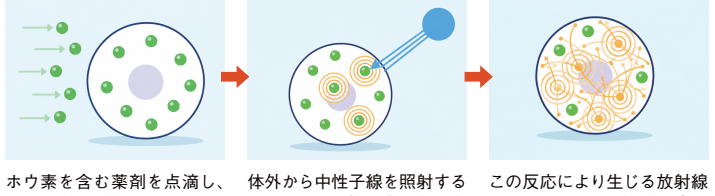
こうした現状に対し、同院ではBNCTサポートデスクでの対応に加え、新たにWEB相談フォームを開設。がん診療の窓口としての役割を果たす澤木明・腫瘍内科主任部長兼がん患者総合支援センター長は、「BNCTに興味をもって来院いただいた患者さんに対し、万が一適合しない場合でも、当院であれば手術や薬物療法など他の適切な治療を提案できる体制を整えています。患者さん一人ひとりに最適な医療を提供したいと考えています」と力を込める。

また、7月にBNCT診療推進特命プロジェクトリーダーに任命された大橋恵・経営戦略室長は、「チーム医療としての情報共有やフォローの面で、院内体制の整備を進めています。患者さんが安心・スピーディーに治療を受けられるよう、環境を整えていきます」と現状の課題と展望を示す。同院では医師や医学物理士に加え、看護師や診療放射線技師、事務職員も含めた多職種カンファレンスを定期的に開催、運用やフォロー体制のブラッシュアップを図っている。

多職種がひとつとなって患者さんに寄り添い、特定臨床研究の症例を積み重ねエビデンスを構築していくことが、BNCTのさらなる普及につながる。同院は困っている患者さんに、先端的医療の機会を届けるべく、さらなる体制強化を進め、取り組んでいく。

BNCTのWEBサイトを開設し「患者さん・ご家族の方」、「医療機関の方」、「海外からのご相談」の3つの相談フォームを用意

BNCTの仕組み



名古屋病院が開院40周年記念特別講演会
ノーベル賞受賞の坂口・大阪大学教授を招聘
テーマは「制御性T細胞と新しい免疫医療」

名古屋徳洲会総合病院は9月10日、愛知県内で開院40周年記念特別講演会を開催した。講師には2025年にノーベル生理学・医学賞を受賞した坂口志文・大阪大学特別栄誉教授を招聘し、「制御性T細胞と新しい免疫医療」と題し講演。会場には約1,000人の参加者が訪れ、世界的な最先端の医学知見に熱心に耳を傾けた。

1000人集い最新知見に耳傾ける

開会にあたり、同院の大橋壯樹総長（医療法人徳洲会副理事長）が挨拶に立ち、開院40周年を迎えたことへの謝意を表し、地域医療を支え続けてきた歴史と今後の発展に向けた意気込みを語った。続いて、来賓を代表し石黒直樹・春日井市長が登壇、同院の歩みに敬意を示すとともに、坂口教授の講演が春日井の地で実現したことへの大きな喜びと祝意を表した。


今後の発展に向けた意気込みを語る大橋総長

講演で坂口教授は、自身が発見した制御性T細胞の機能や役割をわかりやすく解説。免疫システムが過剰に働き、自己の組織を攻撃する自己免疫疾患やアレルギー反応を抑える仕組み、さらに、がん免疫療法や臓器移植での拒絶反応の制御など、制御性T細胞を用いた新たな医療の可能性について詳述した。また、基礎研究から臨床応用へと至る道のりや、研究に対する熱い情熱、未来の医療を担う次世代へのメッセージも提示。


「探求心をもち未来の医療に挑戦します」と加藤院長

講演終了後に、感謝の意を込めて地域の子どもらが花束を贈呈。最後に、同院の加藤千雄院長は「坂口教授のお話のように、探求心をもち未来の医療に挑戦し、徳洲会の“生命だけは平等だ”の理念の下、職員一丸となって地域医療と健康を守る努力を続けてまいります」と誓い、盛況のうちに閉会した。


自身が発見した制御性T細胞の機能を解説する坂口教授

また、同日夜には「第3回拡大版 地域医療機関をつなぐ会」を開催した。近隣の医療機関から多くの医療従事者が集まり、今後のさらなる連携強化に向けて交流を深めた。特別講演では、田島和雄・美杉クリニック院長（元・愛知県がんセンター研究所長）が登壇し、がん研究の歩みや研修時代を共に過ごした坂口教授との思い出などを語った。


地域から約1,000人が参加し熱心に耳を傾ける

最後に、加藤院長は「当院は救急・急性期・高度専門医療を柱としていますが、自院のみでは成り立ちません。地域の第一線で活躍される医療機関や患者さんとのつながりをより強固にし、地域医療に貢献していくことをお約束します」と挨拶し、会を締めくくった。

直言

未来を予測して能動的・迅速に変化 社会と地域の実情を洞察し対応する

患者さんから頼られるのは誇りであり喜び

葉山ハートセンター（神奈川県）院長 飯田 浩司



葉山町と隣接する逗子市を合わせた人口9万の逗葉地区には、急性期病院は他にありません。2000年にハートセンターとして開院した当院には、心臓病以外の診療を求める要望がありました。そこで内科、外科、脳神経外科などの医師とともに総合病院としての機能を付加してきました。救急外来を交代で担当し、救急車の応需数は25年に1,700台を超え、心臓病以外の救急ウォークインも増えました。当院の応需数が増えたことにより、救急搬送時間が短縮されたことが、町の広報誌に紹介されました。

「心臓病センターであるとともに地域に密着した病院でありたい」

7：1基準を満たす看護配置と相まって、今回の診療報酬改定では急性期病院Bの基準を満たし、経営が安定しました。今年度は町と災害時の救護所としての協定を結びました。また地区のメディカルコントロール協議会に参画し、消防署の救急救命士への助言と再教育も行っています。心臓病センターであるとともに、地域に密着した病院でありたいと思っています。

葉山町は「住み続けたい街」ランキング上位の常連です。これは、ここで一生を終えたい街と同義でもあります。その住民に対し何ができるかが課題です。日本救急医学会、日本老年医学会などは合同で、「高齢者救急問題の現状とその対応策についての提言2024」を発表し、高齢者施設での急変対応、看取り、蘇生、搬送に対する考え方、人生会議（ACP）によって本人・家族の意思を確認すること、地域で高齢者を支える方策などを提言しています。

また厚生労働省は高齢者救急という概念を提唱し、本年7月に「新たな地域医療構想策定ガイドライン」を発表しています。40年に向け高齢人口が増加し、高齢者の救急搬送が増え、在宅医療需要が増加します。誤嚥性肺炎、うっ血性心不全、尿路感染、脊椎圧迫骨折、大腿骨頸部骨折など高齢者に特有な病態に対し、受け入れる側の機能として、従来の急性期拠点機能と在宅医療等連携機能、あるいは専門等機能の間に「高齢者救急・地域急性期機能」を提唱しています。高齢の救急患者さんを受け入れ、必要があれば手術を施行し、リハビリテーションを行い、在宅または施設に返す機能を持った病院群です。急性期89床の当院8月の新入院は243人、緊急入院は148人（60.9％）、そのうち118人（79.7％）は65歳以上でした。緊急入院後に手術、カテーテル、内視鏡などの処置を要した患者さんは27例で、大腿骨頸部骨折、慢性硬膜下血腫など高齢者に特有な疾患の手術は8例に行っています。

心臓カテーテル検査・治療が増加 地域包括ケア病棟32床新規開棟へ

当地の二次医療圏では高度急性期と急性期病床は余剰で、回復期病床が必要数の半数しかないことが示されています。来年、当院は地域包括ケア病棟32床を新たに開棟します。葉山町の26年9月の人口は3万1,208人、65歳以上は9,957人です。昨年の救急搬送は1,800人、そのうち1,288人が高齢者でした。高齢人口の12.9％が搬送され、入院が必要とされる中等症、重症は885人、一日当たり2.42人でした。40年には人口が減少しても高齢者は増加し、一日2.79人の高齢者の入院が必要となることが推計され、逗子市からの入院と合わせ、この32床は満床になると予測しています。

昨年は手術室、HCU（高度治療室）の改修が完了しました。本年は田中穣副院長を迎え心臓カテーテル検査、治療が増えています。また特別顧問に浅井徹先生を迎え心臓血管外科手術が充実、心臓病診療もさらに力を注いでいきます。

緊急入院が60％以上、病床回転率は2.7を超え多忙な日々ですが、職員は笑顔で仕事をしています。患者さんに頼られることは医療者の誇りであり喜びです。医師は40代の2人を除き50歳を超えていますが、専門外の診療も協力して行っています。私は救急外来、認知症ケア医、睡眠時無呼吸外来、整形外科手術の助手、HCU当直など、必要なところを補っています。

自然界では偶然の無数の遺伝子変異の中で、環境に適合した変化を獲得した個体が生き残り繁栄すると言われています。我々は未来を予測し能動的に迅速に変化しなければ生き残れません。社会と地域の実情を洞察して対応することが求められます。そうしたなかでも我々の信念は変わりません。“生命だけは平等だ”、皆で頑張りましょう。

徳洲会不整脈部会が第3回会合

症例やグループ推奨品など情報共有

「外科を組み合わせたハイブリッド治療も」

徳洲会不整脈部会は京都市内で第3回会合を開いた。第72回日本不整脈心電学会学術大会の開催に合わせた。ハイブリッド形式で行い、不整脈が専門、または不整脈に関心を寄せる医師やコメディカルが参加。演題発表を行ったり、徳洲会グループ推奨品に関する情報共有を図ったりした。

会の冒頭、部会長の加藤千雄・名古屋徳洲会総合病院院長が挨拶。徳洲会グループでは、各施設で別々に導入・購入しているさまざまな物品を、“グループ推奨品”として、できるだけ統一、共同購入することで、一層のコスト削減を進めている状況を説明した。不整脈領域でも、グループ推奨品の機器を選定したことを報告し、協力を求めた。

加藤部会長の挨拶後、長時間ホルター心電図検査のプレゼンテーションを実施。検査の有用性や今年度の診療報酬改定で評価された内容などを説明した後、グループ推奨品に採用した長時間ホルター心電計を紹介、装置の特徴などを説明した。

会の後半は演題発表を実施。湘南鎌倉総合病院（神奈川県）循環器内科の伊與部隼矩医師、河口達登医師、曽根啓太医師、乙丸友里医師、同院の松永誠吾・臨床工学技士（CE）、鵜野幸恵CE、札幌東徳洲会病院循環器内科の谷友之部長、名古屋病院循環器内科の森武士医師が症例などを発表し、参加者と活発に議論した。



コメディカルも参加し活発に議論

最後に、新田隆・医療法人徳洲会心臓血管外科顧問（羽生総合病院循環器統括顧問）が挨拶。当日学会に出席し、会合に参加していた千葉西総合病院心臓血管外科の中山泰介副部長を紹介し、部会メンバーに加わることを説明。中山副部長が自己紹介した後、新田顧問は出席者に「不整脈治療に、外科を組み合わせたハイブリッド治療のアイデアももってほしいと思います」と呼びかけ、中山副部長とのコラボレーションに期待を寄せた。

後平・札幌もいわ病院院長

睡眠テーマに札幌市長と意見交換

札幌もいわ徳洲会病院の後平泰信院長は8月28日、札幌市の官民対話事業「Meet for the Next2026」に参加、秋元克広・札幌市長と意見交換を行った。

同事業は、より良い街づくりに向け札幌市との連携・協働を望む企業や団体の代表者が、市長と直接、対話するというもの。公募の結果、後平院長は代表者のひとりに選ばれ、「睡眠障害・睡眠不足対策による労働生産性向上とスリープテック（デジタル技術で睡眠の質を測定し、改善を促す手法）の推進」をテーマに提言した。

睡眠不足や睡眠障害は生活習慣病や循環器疾患の要因になったり、労働生産性の低下を招いたりするなど、生活の幅広い領域にかかわり、「医療だけでの解決は難しい」と指摘。そのうえで、スリープテックの実証事業や市民の睡眠実態調査の推進、札幌睡眠健康フォーラムの開催、学校での睡眠教育充実など具体的な対策を挙げるとともに、これらを行政と市内の施設が一体となって進める会議体の設置を求めた。



「官民が協力し地域に睡眠の知見を広めていきたい」と秋本市長と話す後平院長

終了後、後平院長は「睡眠を市民の健康を支える官民共通のテーマにしてほしいと考え、応募しました」と参加動機を説明。「学校での睡眠教育や睡眠を確保しやすい職場づくりなどを進め、『よく眠れるまち・札幌』を地域の皆さんと一緒に育てていきたいです」と意欲的。同院は、日本睡眠学会認定の総合専門医・指導医である後平院長を中心に、今年から睡眠をテーマとする市民公開講座を定期的に開催。6月には北海道内の医療機関で初めて「睡眠障害循環器内科」を標榜するなど、地域の睡眠に対する関心を高める取り組みを行っている。

病気のはなし 237

罹患率は結核の2倍以上

NTM症（非結核性抗酸菌症）

厚生労働省は9月24日からの1週間を「結核・呼吸器感染症予防週間及び非結核性抗酸菌症啓発週間」と位置付け、呼吸器感染症への対策を広く呼びかけた。

2025年の結核の新規登録患者数は9,899人、死亡者数は1,474人に及び、今もって結核は警戒すべき疾患だ。ただ、結核の感染者数は年々減少傾向で、日本は21年に低蔓延国入りを果たしている。

一方、近年、感染者数が急増しているのが、NTM症（非結核性抗酸菌症）だ。全国疫学調査によると人口10万人対罹患率は結核の倍以上となっており、厚労省はじめ各医療機関も警戒を強めている。NTM症は結核菌や、らい菌以外の抗酸菌による感染症の総称で、肺内部に病変をつくることが多く、長引くせきや痰、発熱、呼吸困難などの症状が特徴。悪化すれば死に至ることもある。

NTM自体は土壌など自然環境や家の中（シャワーヘッドの中など水回り）に一般的に生息する菌で、NTMが体内に入っても、必ずしも発症するわけではなく、その人のもつ免疫や体質による。基本的にヒトーヒト感染はしないが、高齢者や基礎疾患のある場合は発症しやすい傾向にあるため、注意が必要だ。厚労省はせきや痰が2週間以上続いたり、微熱や倦怠感が長く続いたりする場合は、医療機関を受診するよう促している。



日本臨床救急医学会

徳洲会グループから37演題 多職種が多様なテーマで発表

徳洲会グループは大阪市内で開かれた第29回日本臨床救急医学会総会・学術集会で16病院が37演題を発表した。一部を紹介する。



佐藤・副センター長（左の写真）と宮田主任は同じテーマのシンポジウムで登壇


重田・救急救命士は自院救急の有効性を発表

「徹底活用！『救急外来における薬剤師業務の進め方』」をテーマとしたシンポジウムで、札幌東徳洲会病院の佐藤洋祐・集中治療センター副センター長、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の宮田祐一・薬剤部主任がそれぞれ発表した。

佐藤・副センター長は「救急外来に薬剤師はどう機能するか―業務指針を起点とした実践と深化」と題し、救急外来に薬剤師が常駐している自院の取り組みを紹介。近年、複数の医療機関を受診し多剤併用（ポリファーマシー）状態にある高齢患者さんが救急外来を受診するケースが増えていると指摘。中毒症例における毒性の評価、急性期脳卒中でのtPA投与や敗血症への適切な抗菌投与など、自院が経験した具体例も示しながら、薬剤師が救急外来に携わる意義の大きさを強調した。搬送件数が増えてもスムーズに対応できるのは「救急外来に薬剤師が常駐しているから」とも説明した。

最後に、服薬情報の迅速な整理は診断精度と診療効率の両方を高めるとし、薬剤師の関与はかつての「調剤」にとどまらず「治療判断を支える臨床パートナー」へ広がっていると指摘、「各施設の実情に応じた薬剤師の参画が、患者安全と診療効率の改善につながります」と結んだ。

宮田主任は「初期診療」をテーマに、救急外来に患者さんが搬送された後の初期診療で薬剤師の役割を説明。自院では、2017年4月から救急外来に薬剤師を専従配置していることを紹介し、薬歴情報の把握と薬学的評価を中心に初期診療に従事している様子を紹介した。

加えて、救急外来専従薬剤師は、薬歴把握を起点に、得られた情報と現病歴をふまえ、救急医と各科専門医に薬剤起因性疾患の可能性、服薬管理上の問題点の指摘、必要な検査や治療薬の提案、今後の検査・治療方針や入院後治療への反映について情報提供・提言も行っていることを明かした。将来、薬歴情報の把握はマイナ保険証から得られる可能性も示唆したが、医師の診療の一助になったり、プラスアルファの情報を提供したりするには、薬剤師がしっかりかかわる必要性を指摘した。

最後に、初期診療では心肺蘇生時の補助、薬剤の準備・調整、患者情報の収集、薬学的評価、薬物治療への提案などに、薬剤師が早期から介入する重要性を強調。また、初期診療の情報収集では、薬歴の把握にとどまらず、薬剤起因性疾患の可能性、既往歴、今後の治療方針に影響を及ぼす情報など、「“薬学的視点を生かしたプラスアルファの情報提供”が薬剤師に求められていると考えます」と結んだ。

病院救急増で消防救急減に寄与

パネルディスカッションでは、大和徳洲会病院（神奈川県）の重田光貴・救急救命士が発表した。テーマは「病院救命士主体の病院救急車の活用と消防転院搬送数の変化～院内資源活用による地域救急への影響の検討～」。

消防救急車の適正利用が求められるなか、同院は23年度に病院救命士を主体として病院救急車を運用し転院搬送を行う体制を構築。25年12月までの取り組みを検証したところ、病院救急車出動件数は年々増加する一方、消防依頼転院搬送数は年々減少。25年は23年度比で約56%減少した。

重田・救急救命士は「院内資源の活用は、地域の救急体制において役割分担の再整理に寄与する可能性を示唆するとともに、転院搬送のあり方や制度設計を検討するうえでの基礎資料となり得ます」と締めくくった。

生駒病院

「不妊治療外来」を開設 手術行える環境が強み！


「不妊治療から小児医療まで一貫したケアを」と今村総長（左）、貴志部長

生駒市立病院（奈良県）は9月1日、不妊治療外来を開始した。産婦人科の外来内で予約に応じて対応し、今村正敏総長を含む同科男女5人の医師が担当する。これにともない、外来の枠を増設。従来は月～金曜日の午後4時までだったが、月・水曜日は午後7時まで延ばし、土曜日（午前）も行う。

同外来では、はじめに妊娠に至らない原因を探る。問診をはじめ検査も行い、主に女性患者さんには、血液検査やエコー（超音波）検査でホルモンの濃度や子宮の状態など、男性患者さんには精液検査で精子の質や量などを確認する。そのうえで治療を開始。まずは自然妊娠を目指し、排卵誘発剤を用いた治療や性交渉のタイミング指導など、患者さんの負担が少ない方法から始める。

同院が手がける強みは、原因究明の段階で手術（主に腹腔鏡）が必要になっても、院内で実施できる点だ。女性患者さんの場合、エコーの結果によって当日中にMRI（磁気共鳴画像診断）検査を行い、不妊症との関連が考えられる子宮内膜症などが指摘されれば、手術を行う。男性患者さんにも、院内の泌尿器科などと連携して対応することが可能だ。

貴志洋平・産婦人科部長は「不妊治療外来を手がける一般のクリニックでは、手術ができないことが多い。当院であれば複数の医療機関を行き来する負担はありません」と強調する。南亜希・産婦人科医師も「妊娠を考え始めたら、セルフチェックのような気持ちで来院してほしい」と呼びかける。

同院は次のステップとして「体外受精の導入」を掲げ、2028年までに環境を整える方針。今村総長は昨年度、約240件の分娩に対応したことなどをアピール。「産科医療を起点に、不妊治療から小児医療まで、一貫したケアを広げていきたいです」と抱負を語る。

初期臨床研修指導医養成講習会

指導医の心構えやスキル学ぶ 宇治徳洲会病院



北海道から沖縄県までグループ内外の医師29人が参加

宇治徳洲会病院（京都府）は、院内で今年度の初期臨床研修指導医養成講習会を開いた。臨床現場で研修医を教育する臨床研修指導医（指導医）の養成を目的に、2023年度から年1回主催しているイベントで、プログラムは厚生労働省の「医師の臨床研修に係る指導医講習会の開催指針」に準拠。4回目となる今回は徳洲会グループ内外から29人の医師が受講した。ディレクター（主催責任者）は末吉敦院長（徳洲会グループ研修部門統括責任者）、チーフタスクフォース（企画責任者）やタスクフォース（世話人）は福井道彦・集中治療科顧問をはじめ、同院の医師が多く務めた。受講者はeラーニングによる事前学習をすませたうえで臨んだ。

初日は、主にグループワークを実施。研修2年目修了時に期待する臨床能力や、研修医が研修目標を達成するための具体的な計画・準備、評価方法などをテーマとし、それぞれ最後に講師が解説した。また、末吉院長が講義も行い、国が進める医療の方向性や徳洲会グループの現状、自院の取り組みなどについて説明した。

2日目は「コーチングを用いたフィードバック」、「指導医のあり方」、「問題点への対応」などをテーマに、講義やグループワークを行い、最後に全員が修了証を受け取った。

唯一、離島から受講した徳之島徳洲会病院（鹿児島県）の太拓也・外科医師は「自分が研修医だった10年ほど前と研修のあり方がだいぶ変わっていると感じました」と振り返った。

福井顧問はスタッフの世代交代が進んだ点を評価。「最前線で働いている中堅層の医師がタスクフォースなどで参加してくれるのは、“最大の資産”。若い力で講習会がアップデートしていくめどが立ったように思います」と、期待を込めていた。

佐藤・東京西病院名誉院長

立川市がん条例イベントで講演


地域のがん医療について提言する佐藤・名誉院長

東京西徳洲会病院の佐藤一彦・名誉院長（包括的がん診療センター長兼乳腺腫瘍センター長）は、「立川市がん条例制定記念シンポジウム」で講演した。

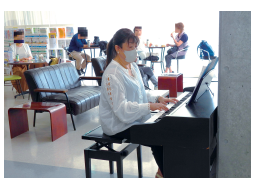
シンポジウムは、条例の制定にも尽力した乳がんを中心とする女性特有のがん患者会「NPO法人ブーゲンビリア」（内田絵子・統括理事長）が主催。酒井大史・立川市長をはじめ、行政関係者や市議会関係者、市民らが多数参加した。

佐藤・名誉院長は「地域主導のがん医療の現状とその課題」と題し、専門とする乳がんを例に、立川市を含む北多摩西部医療圏（二次医療圏）のがん医療について課題を指摘。専門医偏在の是正、施設間や多職種の連携強化などを挙げ、がん条例の制定で解決に期待しつつも、「まだスタートの段階。いかに条例を育て、地域に落とし込んでいくかが大事」と強調した。

続く第3部でもシンポジストのひとりとして登壇。がんに対する地域住民のリテラシー（ある分野の情報を理解・活用する基礎的な能力）を皆で高めていく重要性を説いた。

武蔵野病院が院内ピアノコンサート

がん治療受けた患者さん演奏


ピアノの調べが辺りを包み、癒やしのひと時を提供

武蔵野徳洲会病院（東京都）は8月28日、院内ピアノコンサートを開催した。ボランティアで奏者を務めたのは、定期検査のため通院している髙橋智子さん。1階の休憩スペースにある電子ピアノを奏で、患者さんや家族に癒やしのひと時を提供した。

髙橋さんは過去に東京西徳洲会病院で乳がんの治療を受け、10年経過後の検査で腎臓がんが見つかり、武蔵野病院でロボット支援手術を受けた。


「感謝の気持ちを込めて弾きました」と髙橋さん

「どちらの病院でも職員の方々に本当によくしていただきました。感謝の気持ちをお返しできるとすればピアノ演奏かなと思い、奏者を務めました」。髙橋さんは幼少期から長年、本格的にピアノを修練した経験をもつ。

「海の見える街」、「夜の踊り子」といったポップスや、クラシックの「もみの木」など披露。午後12時半に演奏を開始し、昼食を取る手を止めて聴き入る聴衆の姿が見られた。弾き終えた髙橋さんは「ホッとしました。気持ちを込めて弾きました」と振り返った。

三味線と民謡に聴衆も大合唱

八尾病院が院内会議室で演奏会


瓜生副院長は三味線だけでなく民謡も披露

八尾徳洲会総合病院（大阪府）は9月5日、院内会議室で入院患者さんを対象とした三味線と民謡のコンサートを開催した。演目は、福島県の「会津磐梯山」や熊本県の「おてもやん」、大阪府の「淀川三十石船舟歌」など。

日本民謡皐月会の大平佳美会主が率いる会のメンバーと、尺八奏者の松葉隆山さんによる演奏に、参集した患者さんら59人は静かに耳を傾けていた。ソーラン節と、こきりこ節の2曲は聴衆も含め大合唱となり、思い思いに声を張り上げた。

同院ではこれまでも院内コンサートを開催してきたが、新型コロナ感染症の影響で中断、今回は華々しいリスタートとなった。演奏会の発起人である瓜生恭章・副院長兼腫瘍内科部長は「今後もコンサートを続けていきたい」と意欲的で、今年度中にあと2回開催予定。次回はジャズコンサートを企画している。


参集した患者さんや職員による大合唱も

八尾徳洲会総合病院

「緩和ケアの基本」を学ぶ

医師ら27人が研修会に参加し意見交換

八尾徳洲会総合病院（大阪府）は院内で今年度の緩和ケア研修会を行った。同院をはじめ関西・大阪ブロックの徳洲会グループ病院から医師を中心に緩和ケアに携わる医療従事者 27 人が参加。今回は研修医など若手医師が多く、座学やロールプレイ、グループワークなどを通じて活発に意見交換しながら緩和ケアの基本を学んだ。研修内容は「日本緩和医療学会 PEACE プロジェクト」に準拠。

PEACE プロジェクトは国の方針に基づき、日本緩和医療学会が日本サイコオンコロジー学会の協力を得て開発した主に医師を対象とする緩和ケアの継続教育プログラム。がん医療に携わるすべての医師を対象とし、緩和ケアの基本的な知識・技術・態度を学ぶ「緩和ケア研修会」と、緩和ケア領域で一定の経験をもつ医師を対象とし、成人に対する教育法や指導法を学ぶ「指導者研修会」を設けている。

このうち「緩和ケア研修会」は、e ラーニングと集合研修で構成、e ラーニングを修了したうえで、2 年以内にがん診療連携拠点病院などで開催される集合研修を修了しなければ、「緩和ケア研修会修了者」と認められない。

e ラーニングは緩和ケア概論、全人的苦痛と包括的アセスメント、がん疼痛、呼吸困難、せん妄、コミュニケーション、療養場所の選択と地域連携、ACP（人生会議）、看取りのケア、家族・遺族ケア、がん以外の疾患に対する緩和ケア、その他の身体的苦痛に対する緩和ケア、不眠、緩和的放射線治療・神経ブロック・IVR（画像下治療）による症状緩和、社会的苦痛に対する緩和ケアなどをテーマとし、学習時間の目安は合計 8 時間超に上る（医師以外の医療従事者は一部免除）。

集合研修は、これらのうちのコミュニケーションや療養場所の選択と地域連携などをグループワークやロールプレイを通じて、さらに学ぶ。

八尾病院は大阪府がん診療拠点病院として「緩和ケア研修会」を 2014 年からコロナ禍を除き毎年開催。「学べる貴重な場」として、院内はもちろんグループ内外から参加者が集まっている。

今回は、同院以外に野崎徳洲会病院（大阪府）、吹田徳洲会病院（同）、生駒市立病院（奈良県）の職員が参加。医師だけでなく、看護師や医療ソーシャルワーカーの姿も見受けられた。

受講者は事前学習の e ラーニングを修了し、集合研修の会場である八尾病院に来院。はじめに研修会主催者として同院の原田博雅院長が挨拶し、あらためて研修会の意義などを伝えた。続いて今回の研修企画責任者でもある片上徹也・精神科医長が集合研修の概要を説明し、プログラムがスタート。池下和敏・麻酔科部長が講師を務め、e ラーニングの復習を行った。



集合研修で挨拶をする原田院長


企画責任者の大役を果たす片上医長


若手が多く参加し積極的に議論、会場は活気ある雰囲気に


グループワークで話し合った内容を画面に表示し共有

その後、休憩をはさみながらロールプレイやグループワークを実施。各グループにファシリテーターが付くなか、「コミュニケーション」では受講者が医師・患者さん・観察者役を交互に務め、オピオイド鎮痛薬を開始する際の説明や治療が困難ながんを告知する場面を演じたりした。「療養場所の選択と地域連携」ではグループ内で在宅移行への進め方などを話し合い、地域連携や患者さんや家族の思いに寄り添うポイントなどを学んだ。各グループが話し合った内容を発表し合い、受講者が共有する時間も設けた。

集合研修は約 6 時間で終了。今回の受講生 27 人全員が無事に修了した。参加した八尾病院の藤本航輝研修医（2 年次）は「緩和ケアは答えがひとつではないと思うので、グループワークなどを通じて他の方の考えを聞けたのが良かったです」と顧みた。印象的なプログラムには「コミュニケーション」を挙げ、「患者役を演じて、がんの患者さんでなくても、日々の患者さんとの会話で“もう少し間の使い方に気を付けたほうが良いかな？”など気付きが得られました」と振り返った。

片上医長も「私自身も今回、あらためてロールプレイの重要性を実感しました。ふだんは医療者として診療する立場ですが、患者役になることで、“どの言葉に安心し、どの説明で不安になるのか”を、身をもって感じることができます」と納得していた。

命救う医療に心に寄り添う優しさ「全人的医療」も大切にする病院

緩和ケア研修会について片上医長は、「がん診療に携わる医師が、症状緩和や患者・家族とのコミュニケーションなどを実践的に学ぶ重要な研修」と強調。「がんや難病の告知、余命についての説明など、患者さんの人生を大きく左右する場面では、言葉の選び方や間の取り方ひとつで安心感が大きく変わります。今回の研修では、患者役を経験することで、伝え方の大切さをあらためて実感してもらえたと思います。救急医療や高度急性期医療に力を注ぐとともに、患者さん一人ひとりの不安や苦痛にも寄り添える、心の通った優しい医療を提供できる病院でありたいと思います」と続けた。

長年にわたって同研修会の開催に携わり、今回もファシリテーターとして参加した髙原良典・総合診療部長（研修委員長）は「今回は若い受講者が多かった一方、当院副院長の薦岡成年先生（心臓血管センター長兼務）など経験豊富な方もおられました。心臓血管外科は、あまりがんを扱いませんが、ご自身の診療経験で受講してください ました。会の進行もスムーズで良かったです」と笑顔。

また、研修会の継続に向け、世代交代が進んでいる点も指摘。「受講者を導く側はもち回りで務めていますが、今後も続けていくためには、新しい方に加わってもらい、もう少し広げたほうが良いと思い、片上先生などに昨年資格を取得してもらい、今回、中心的にかかわってもらいました。精神科で指導担当者は当院初です」と説明し、「大阪府の場合、緩和ケア研修会の開催が研修医の募集定員にかかわってくることがあるので、できるだけ開催を維持できるようにしたいと考えています」とも加えた。

同院は来年度も引き続き開催していく方針。片上医長は「今回このような貴重な役割を任せていただき、多くの先生方やスタッフに支えていただきながら運営できたことは、私自身にとっても大きな学びでした。多職種が協力し合う徳洲会らしいチーム医療を実感する一日となりました」と関係者に謝意を表し、「今後も患者さん一人ひとりの苦痛や思いに寄り添える医療を実践するとともに、研修会を通じて実践できる人材育成につながれば」と期待を寄せた。

吹田病院

第1回地域連携学術講演会 新体制を地域の医師に紹介


刷新した吹田病院の診療体制を確認する大阪府医師会メンバー

吹田徳洲会病院（大阪府）は8月22日、大阪市内で第1回地域医療連携学術講演会・情報交換会を開催した。同会は大阪府医師会の生涯教育システム単位取得講座でもあり、地域の医師50人が参加。

冒頭、北田文則院長が登壇し、1月から3代目院長に就任した挨拶に加え、4月から救急科、呼吸器内科、整形外科に医師が入職し、院内の診療体制を刷新したことを伝えた。同会では、新たに入職した医師が、それぞれの診療内容・専門領域を紹介した。

八木啓一・院長補佐兼救急センター長は自己紹介した後、現代では検査に頼りがちであるものの、問診こそが診断に至る重要なポイントであることを指摘した。

岡田あすか呼吸器内科部長は、肺がんの診断に重要な遺伝子検査やPD-L1（免疫チェックポイント）検査が自院で可能となり、同院で診断から治療まで肺がん診療のすべてに対応できることを強調した。

整形外科からは、和田英路副院長、西川昌孝・主任部長、蒲生和重・部長兼手外科・肘関節センター長が講演。和田副院長は脊椎疾患とその治療法を解説、また救急搬送患者さんの多くが高齢者であり、救急医療とは高齢者医療でもあることを指摘、来院が難しい患者さんについては、かかりつけ診療所まで迎えに行く構想もあることを明かした。

西川・主任部長は変形性膝関節症の治療について言及。同疾患の患者さんのボリュームゾーンは70～80代と高齢化しており、そのぶん治療の難易度も高いことから、人工膝関節置換術は西川・主任部長ももつ人工膝関節専門医の資格を取得している医師に任せてほしいと訴えた。

蒲生部長は手やひじの各疾患の治療法を解説、関節リウマチなどメジャーな疾患だけでなく、ヘバーデン結節など希少疾患の治療も実施していることを伝えた。最後に和田副院長が『北摂スポーツセンター』構想を披露。

学術集会後は交流会を開催、吹田病院各部署のスタッフが自部署の特徴などを地域の医師に紹介した。

吹田病院がキッズフェスタ

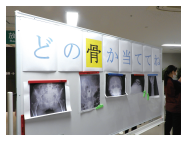
「ミャクミャク」など登場で大にぎわい

吹田徳洲会病院（大阪府）と院内に併設する介護老人保健施設（老健）吹田徳洲苑は、キッズフェスタを開催した。地域の子どもを対象にしたイベントで昨年に続き2回目。今回も医師や看護師、コメディカルら、ほとんどの部署が参加し、それぞれブースを構えて体験コーナーなどを企画した。とくに手術支援ロボット「ダヴィンチ」やAED（自動体外式除細動器）の体験コーナーが人気だった。


オープニングで挨拶する（左から）北田院長、西野・看護部長、「すいたん」

また、今年は目玉企画のひとつに、マスコットキャラクターを活用。昨年の大阪・関西万博公式キャラクター「ミャクミャク」と、地元・吹田市のイメージキャラクター「すいたん」が午前と午後に会場に現れ、撮影会など行った。登場する時間帯は明かされていなかったため、朝から多くの親子が駆け付けるとともに、両キャラクターが姿を見せると、会場は一層にぎわった。北田文則院長と西野万寿子・看護部長も映画のキャラクターに扮し、会場を盛り上げる場面もあった。

天候にも恵まれたこともあり、約1,500人が参加。隣接する茨木市から訪れた方は「病院のイベントに参加するのは初めて。子どもも楽しんでいて、勉強にもなる良いイベントだと思います」と満足げだった。中心的に準備を進めた並河俊弘・老健吹田徳洲苑事務長は「スタッフも楽しんでいる様子がうかがえるので、今年も開催して良かったと思います。来年も多くの方に集まってもらえるよう、頑張ります」。

放射線診断科のブース。3Dプリンターで人体の骨を再現しクイズで学ぶ